

尙一般讀書子の爲には書中の外國固有名詞に原語を附せられたいし、又索引の如きもあつて欲しいと思はれる。口繪挿畫は孰れも著者の見識を以て撰擇せられたものだけあつて、讀者に深き興趣を催さしめるものである。

以上余輩は自己の不識を顧みないで猥りに卑見を開陳し、博士の高著に對し妄評を加へたに就いては、切に博士の寛容を仰ぎ更に示教を乞ふ次第である。而も余輩をして斯の如き迂言妄評を敢てするに至らしめたものは、我西洋史界に、本邦にては新しい試みであり、外國に於ける類書に對しても確かに特色を備へた、價値ある述作を得た歡喜の心情に外ならないのである。

## 庄園制度之大要

文學博士 吉田 東 伍 著

（大正五年六月十五日發行）

本書は吉田博士が日本學術普及會發行に係る「歴史講座」の第五篇として述作せられたものである。その内容は劈頭先づ開講の心得と題して、庄園研究の困難なる事情と研究の必要なる所以を述べ、以下十七章に分ち庄園の名義より説いて、その起源沿革を詳説し、庄園制崩壊して近世封建の建立の事情を述べて筆を擱いてある。尙餘論として別に江戸時代社會制度の大綱を加へられてゐるが全篇凡そ二百五十頁、此間史料の寫眞版數葉を挿入して讀者に興味を添へて居る。大體に於て簡易平明の叙述で、専門の學者にも、一般の讀者にも歡迎せらるべき好著であらう。

庄園研究は維新以來史學の勃興と共に各種の學者に依つて注意を喚起せられ、研究せられ、又現に盛に考究せられつゝある事項であるが、尙充分なる結果を得られた様に思はれない。嘗てなされたる最も注意すべき研究としては栗田文學博士の

「莊園考」と題する百八十頁餘の論文と（明治二十年發表）、中田法學博士の國家學會雜誌々上に發表せられた「王朝時代の莊園に關する研究」と題するものゝ二つであらう（明治卅九年發表）。尙其他に

は「大日本史食貨志」や、星野文學博士の「守護地頭考」や、又三上、辻兩文學博士及び芝文學士の共著たる「東京帝國大學文科大學紀要第一社寺領性質の研究」などは餘程此問題に密接なる關係を有するもので、尙又經濟大辭書の中莊園の項（芝文學士執筆）なども其研究が新しいだけに注意すべきものである。然るに今又新に史學に造詣深き吉田博士によりて此新著が公表せられたのは吾人は學界の爲め欣喜に堪へない。然れども本書の内容が大體に於て博士の名著大日本地名辭書汎論の部の政治沿革篇に記述せられたる莊園の事項と大差ないのは、昔て地名辭書に據りて博士の高見を窺へる吾人には少からず失望したことである。尤も博

士の見解が地名辭書記述の時代と其間大なる徑庭を見ず、愈々其確信を得られたるものと解すれば此新著の意味も、又重要となるのであらう。

此著の序文に「この講座は政治、經濟、法制の歴史はた社會觀察のそれに對揚せらるゝ所あるべきを豫想して一般の思想を構築したものである。さてその効果は本當に見たかどうかは本人の愚想にも形の如く分らぬが「天下後世に問ふ」と題して逃路を立派に開いて置きたい」と、謙讓の文にて書いてあるが、吾人は此著の内容に於いて、博士の目的は充分に達せられたことと思ふ。殊に第十七章近世封建の建立即ち立券の莊園制度が變じて獨占の領分制（一分一圓所有）となり漸次進んで、遂に莊園の舊法破れ、封建の新形勢の成就するに至る筋道の説明は書中最も注目すべきところであらう。

さて今吾人は本書の内容に就いて一々詳細なる

紹介と批評とすることは容易ならぬことでもあり且つ紙數の許さざる所でもあるから、今はたい博士の莊園研究に對する態度に就いて少しく希望を述べて見たい。第一本書は莊園制度そのもの、經濟史的研究に乏しい様に想ふ。著者は此著の緒論に於て「中世の莊園は即ち産業そのもの、全体である」とまで力説せられて居る。即ち當時の經濟生活が莊園を以て代表し得るとのとなれば、此莊園時代なるものは本邦に於ける經濟發達の階段に於て如何なる地位を占むるものであるが、莊園住民の經濟生活の状態は如何か、莊園は一つの經濟範圍であるかの如き問題は最も重要で、且つ最も困難なる研究事項であるから博士の如き斯學に造詣深き學者の見解は何人も窺いたいのである。然るに本書に於ては此等の説明を見ることが出來ないのみならず、博士が嘗て地名辭書汎論八二頁に於て「立券の莊園制變じて獨占の領分制となり來

れるは、彼れ戰亂を經しが故のみにあらず、所謂ゆる物權發達の次第に於いて人心上の欲望、經濟上の意義も加はりしならむ、(其理論證例は今茲に説くの餘地なし)」と記述せられたるに拘はらず、今又此著に於ても此點に就いては地名辭書の文を踏襲せられたのみで何等の説明を加へられないのは遺憾千萬と云はねばならぬ。

據つて試みられて以來、この方面の研究が一段落をなして進まない様である。法學者としての中田博士の研究は、一面、史家に取りて首肯し難い點も尠くない様に思はれ、此等の點に就いての著者の見解を窺いたいのも、また吾人の一つの希望であつたが、此新著に於て、遂に其高見を見ることが出來なかつたのは甚だ遺憾に思ふところである。

要するに本書は莊園の大体を極めて通俗に平明に叙説せられたもので、統一的記載に困難なる此

問題を、幸に博士に據りて斯く世間一般に紹介せられた點は、吾人深く感謝せねばならぬ。「魚澄」

## 文明と氣候 (E. Huntington: Civilization and Climate. — Yale University Press, 1915)

「文明と氣候」は、題目として陳腐の嫌があるの

で何人と雖兩者の間に關係の有ることを否定する者はあるまい。然し其關係の性質及び計數的研究となるに、學者にとりての活動の餘地は、バックル以來著しく減しては居らぬ。されば此著者の試みの如きは慥かに新機軸をあらはしたものであつて、其學界に寄與した功績の沒し難いものがある。總計十三章より成る本書の大体は、先づ文明の發達が人種の如何にもよること勿論ではあるが、それと同時に、氣候の影響を受けること莫大であるといふことからして説き起し、其氣候を論ずる

に當りては、最初に四季の變遷が人の活動に如何に影響するかを論じて、活動の最も鈍ふる季節は一月二月の交と七月八月の交とで、活動の最も旺盛にあり得るのは、五月六月の交と十月十一月の交とであると結論し、此結論からして更に一步を進め、溫度からして云へば平均が華氏三十八度以上六十五度以下、簡單に云へば平均五十度位がよろしく、濕度は百分の六十位が適宜であると云ひ、次にはさればとて三百六十五日を通じて斯かる溫度を有するのが理想的氣候の土地とは云へぬ、理想的氣候といふのは活動に適應することを前提としたものでなければならぬ、變化の少い氣候は刺激に乏しく、活動をなすに不便である、眞の理想的氣候には、適當な溫度濕度の必要なると同時に、適當な變化が伴はなければならぬ、而して此變化を起さすものは cyclonic storm である、此 storm のない所には高等な文明が成り立たぬと云